

日本の名作名文ハイライト

雑

芥川龍之介

朗読 wis

出所 【朗読】声を便りに、声を頼りに——。

<http://18.art-studio.cc/~koenoizumi/>

teabreak 編

雛 芥川龍之介

箱を出る顔忘れめや雛二対 蕪村

● 冒頭部分

これはある老女の話である。

……横浜のあるアメリカ人へ雛を売る約束のできたのは十一月頃のことでございます。紀の国屋と申したわたしの家は親代々諸大名のお金御用を勤めておりましたし、ことに紫竹とか申した祖父は大通の一人にもなっておりましたから、雛もわたしのではございますが、中々見事にできておりました。まあ、申さば、内裏雛は女雛の冠の瑗瑠にも珊瑚がはいっておりますとか、男雛の塩瀬の石帯にも定紋と替へ紋とが互違いに繡ひになっておりますとか、そういう雛だったのでございます。

それさえ売ろうと申すのでございますから、わたしの父、十二代目の紀の国屋伊兵衛ほどの位手もとが苦しかったか、大抵御推量にもなれるでございます。何しろ徳川家の御瓦解以来、御用金を下げた下すったのは加州様ばかりでございます。それも三千両の御用金の中、百両しか下げては下さいません。因州様などになりますと、四百両ばかりの御用金のかたに赤間が石の硯を一つ下すただけでございます。

した。その上火事には二三度も遇いますし、蝙蝠傘屋などをやりましたのも皆手違いになりますし、当時はもう目ぼしい道具もあらかた一家の口すごしに売り払っていたのでございます。

そこへ雛でも売ったらと父へ勧めてくれましたのは丸佐という骨董屋の、……もう故人になりましたが、禿げ頭の主人でございます。この丸佐の禿げ頭位、可笑しかったものはございません。と申すのは頭のまん中にちょうど按摩膏を貼った位、入れ墨がしてあるのでございます。これは何でも若い時分、ちよいと禿げを隠す為に彫らせたのだそうでございますが、生憎その後頭の方は遠慮なしに禿げてしまいましたから、この脳天の入れ墨だけ取り残されることになったのだとか、本人自身申しておりました。……そういうことは兎も角も、父はまだ十五のわたしを可哀そうに思ったのでございましょう、度々丸佐に勧められても、雛を手放すことだけはためらっていたようでございます。

それをとうとう売らせたのは英吉と申すわたしの兄、……やはり故人になりましたが、その頃まだ十八だった、癩の強い兄でございます。兄は開化人とも申しましようか、英語の読本を離したことの無い政治好きの青年でございました。これが雛の話になると、雛祭などは旧弊だとか、あんな実用にならない物は取って置いても仕方がないとか、いろいろけなすのでございます。その為に兄は昔風の母とも何度口論

をしたかわかりません。しかし雛を手放しさえすれば、この大歳の凌ぎだけはつけられるのに違いございせんから、母も苦しい父の手前、そうは強いことばかりも申されなかつたのでございましょう。雛は前にも申しました通り、十一月の中旬にはとうとう横浜のアメリカ人へ売り渡すことになってしまいました。何、わたしでございますか？それは駄々もこねましたが、お転婆だつたせいでございましょう。その割にはあまり悲しいとも思わなかつたものでございます。父は雛を売りさえすれば、紫縹子の帯を一本買ってやると申しておりますから。……

●最終部分

その晩も皆休んだのは十一時過ぎでございます。しかしわたしは眼をつぶつても、容易に寝つくことができません。兄はわたしに雛のこととは二度というなと申しました。わたしも雛を出して見るのはできない相談とあきらめております。が、出して見たいことはさつきと少しも変りません。雛は明日になつたが最後、遠いところへ行ってしまふ、——そう思えばつぶつた眼の中にも、自然と涙がたまつて来ます。——そみんなの寝ている中に、そつと一人出して見ようか？——そうもわたしは考えて見ました。それともあの中の一つだけ、何処か外へ隠して置こうか？——そうもまたわたしは考えて見ました。しかしどちら

も見つかつたら、——と思うとさすがにひるんでしまいます。わたしは正直にその晩位、いろいろ恐いことばかり考えた覚えはございません。今夜もう一度火事があればいい。そうすれば人手に渡らぬ前に、すっかり雛も焼けてしまう。さもなければアメリカ人も頭の禿げた丸佐の主人もコレラになつてしまえばいい。そうすれば雛は何処へもやらずに、このまま大事にすることができる。——そんな空想も浮んで参ります。が、まだ何と申しても、そこは子供でございますから、一時間たつたたたない中に、何時ごろとうと眠つてしまいました。

それからどの位たちましたか、ふと眠りがさめて見ますと、薄暗い行灯をともした土蔵に誰か人の起きているらしい物音が聞えるのでございます。鼠かしら、泥坊かしら、またはもう夜明けになったのかしら？——わたしはどちらかと迷いながら、怯づ怯づ細眼を明いて見ました。するとわたしの枕もとは、寝間着のままの父が一人、こちらへ横顔を向けながら、座っているのでございます。父が！……しかしわたしを驚かせたのは父ばかりではございません。父の前にはわたしの雛が、——お節句以来見なかつた雛が並べ立ててあるのでございます。

夢かと思うと申すのはああいう時でございます。わたしはほとんど息もつかずに、この不思議を見守りました。覚束ない行灯の光の中に、象牙の笏をかまえた男雛を、冠の瑛珞を垂れた女雛を、右近の

橘を、左近の桜を、柄の長い日傘を担いだ仕丁を、眼八分に高坏を捧げた官女を、小さい蒔絵の鏡台や筆筒を、貝殻尽しの雛屏風を、膳碗を、画雪洞を、色糸の手鞠を、そうしてまた父の横顔を、……

夢かと思うと申すのは、……ああ、それはもう前に申し上げましたが、ほんたうにあの晩の雛は夢だったのでございましょうか？ 一囃に雛を見たがった余り、知らず識らず造り出した幻ではなかったのでございましょうか？ わたしは未にどうかすると、わたし自身にもほんたうかどうか、返答に困るのでございます。

しかしわたしはあの夜更けに、独り雛を眺めている、年とった父を見かけました。これだけは確かでございます。そうすればたとい夢にしても、別段悔やしいとは思いません。とにかくわたしは眼のあたりに、わたしと少しも変らない父を見たのでございますから、女々しい、……その癖おごそかな父を見たのでございますから。

「雛」の話を書きかけたのは何年か前のことである。それを今書き上げたのは滝田氏の勧めによるのみではない。同時にまた四五日前、横浜のあるイギリス人の客間に、古雛の首を玩具にしている紅毛の童女に遇ったからである。今はこの話に出て来る雛も、鉛の兵隊やゴムの人形と一つ玩具箱に投げこまれながら、同じ憂きめを見ているのかも知れない。